

# 琉球大学学術リポジトリ

## [原著]過去5年間の琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科悪性腫瘍統計

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学保健学部 公開日: 2014-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古謝, 将宏, 栗田, 建一, 新垣, 義孝, 又吉, 重光, 源河, 朝博, 野田, 寛, Koja, Masahiro, Kurita, Ken-ichi, Arakaki, Yoshitaka, Matayoshi, Shigemitsu, Genka, Tomohiro, Noda, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016434">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016434</a>

# 過去5年間の琉球大学保健学部附属病院

## 耳鼻咽喉科悪性腫瘍統計

琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科

古謝将宏 栗田建一 新垣義孝  
又吉重光 源河朝博 野田 寛

### はじめに

昭和48年4月琉球大学保健学部附属病院に耳鼻咽喉科が開設されて以来、昭和53年3月までの5年間に、当科において取り扱われた悪性腫瘍患者の統計的観察を試みた。

100万余の人口を有する沖縄県において、耳鼻咽喉科領域の悪性腫瘍に本格的に取り組む施設は、現在もなお当院に限られており、その実態はほぼ当県の実態とみなして良く、今回は当科開設以来5年を経過しているので、3年以上の粗生存率についても検討した。

### 観察対象ならびに方法

観察対象は表1に示すごとく、昭和48年4月より昭和53年3月までの当科の悪性腫瘍患者総計228例で、これを年度別、発生部位別、年令別、性別に統計をとり、そのうち発生部位を口腔（口唇、頬粘膜、歯肉、硬口蓋、口腔底、舌）、咽頭（上咽頭、中咽頭、下咽頭）、喉頭、鼻・副鼻腔（上顎、鼻腔、上顎を除く副鼻腔）、聴器、その他の6項目に区分し、その病理組織像、治療法および転帰について検討し、さらに疫学、発癌要因などについても若干の文献的考察を加えてみた。

### 観察結果ならびに考按

#### I. 年度別、年令別、性別の観察結果

5年間を通して、頭頸部悪性腫瘍患者は、各年度ともに、耳鼻咽喉科患者総数の約4%（昭和48年度—21例、49年度—49例、50年度—56例、51年度—50例、52年度—52例）を占めていた（表1）。初診時における年令別分布は、60才代が79例でもっとも多く、ついで50才代、70才代の順で、いわゆる癌年令層に

表1 耳鼻咽喉科過去5年間の悪性腫瘍患者年度別統計

	48年度	49年度	50年度	51年度	52年度	計
口 腔	2	10	11	5	12	40
口 唇		1			1	2
頬 粘 膜	1	2	3	1	2	9
歯 肉					1	1
硬 口 蓋		1	1		1	3
硬 口 腔 底	1	3	1	2	2	9
舌		3	6	2	5	16
咽 頭	6	19	19	15	16	75
上 咽 頭	4	5	4	4	1	18
中 咽 頭	2	5	7	7	9	30
下 咽 頭		9	8	4	6	27
喉 頭	6	8	12	13	13	52
鼻・副鼻腔	6	10	8	12	7	43
上 顎	4	6	5	9	4	28
鼻 腔	1	3	3	2	3	12
副 鼻 腔	1	1		1		3
聴器（中耳）	1				1	2
そ の 他		2	6	5	3	16
食 道		1	2	2		5
甲 状 腺			2	1		3
上 眼 瞼				1		1
下 眼 瞼			1	1		2
Hodgkin病			1		1	2
Wegener肉芽腫症		1			2	3
総 計	21	49	56	50	52	228

頻度が多くみられ、患者総数228例の男女比は3.4:1であった（表2）。

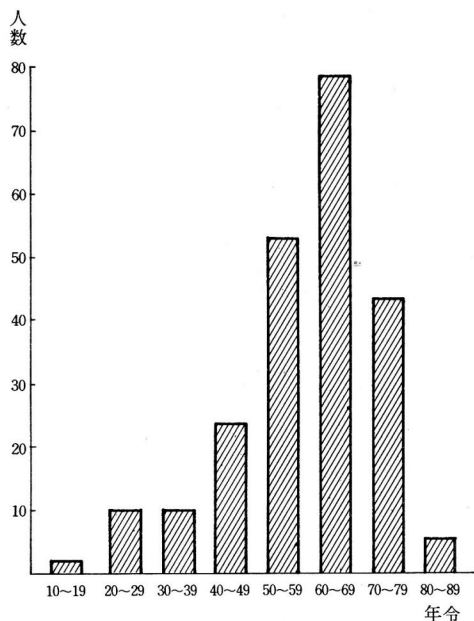
#### II. 発生部位別の観察結果とその分析

##### A. 口腔の悪性腫瘍について（表3）

5年間に40例を経験し、頭頸部悪性腫瘍中、口腔癌の占める割合は、当科においても諸報告<sup>1)</sup>でも20%内外となっている。

部位別発生頻度は、諸報告<sup>1) 2)</sup>では舌癌が過半数を占めているが、当科における舌癌は40%のみで、ほか口唇癌5.0%、頬粘膜癌22.5%、歯肉癌2.5%、硬

表2 初診時における年齢別分布



●総数228 (♂176:♀52)

口蓋癌7.5%、口腔底癌22.5%となっており、諸報告<sup>1) 2) 3)</sup>と異なった結果となったが、これは琉球大学保健学部附属病院における口腔外科とのかねあいによるものと考えられた。

性別については、当科および諸報告<sup>1) 2)</sup>ともに男性が女性の約2倍となっており、とくに口唇、頬粘膜、口腔底では男性に頻度が高い傾向があった。

病理組織像については、諸報告<sup>1) 2)</sup>では、扁平上皮癌がほとんどのことであったが、当科においても不詳2例を除き、全例が扁平上皮癌であった。

治療法および転帰は表3のごとくであるが、舌癌の治療法において、化学療法として6例浅側頭動脈よりの動注法例が含まれており、放射線療法と併用されている。

B. 咽頭の悪性腫瘍について (表4)

1) 上咽頭腫瘍

当科においては5年間に18例を経験し、これは頭頸部悪性腫瘍の7.9%に相当し、年齢では20才台7人を含め、平均年齢41才と比較的低年齢であった。

性別については男性15例、女性3例、男女比5:1で、諸報告<sup>2) 4)</sup>でも男性に多い傾向があった。

病理組織像は1968年より1974年の全国統計<sup>5)</sup>にお

表3 口腔の悪性腫瘍

口唇 (♂1:1♀)	2	扁平上皮癌2 健在1, 不明1	手+放 放+化	1 1
頬粘膜 (♂6:♀3)	9	扁平上皮癌9 健在 担癌生存 癌死 非癌死 不明 4 0 1 0 4	放+化 放+化+免 手+放+化	6 2 1
歯肉 (♂1)	1	扁平上皮癌 健在1	放+化+免	1
硬口蓋 (♂2:♀1)	3	扁平上皮癌3 健在 担癌生存 癌死 非癌死 不明 0 1 0 0 2	手+化 放+化+免 未治療	1 1 1
口腔底 (♂8:♀1)	3	扁平上皮癌9 健在 担癌生存 癌死 非癌死 不明 0 0 2 0 7	放+化+免 放+化 化 免 未治療	3 2 1 1 2
舌 (♂9:♀7)	16	扁平上皮癌14 不詳 2 健在 担癌生存 癌死 非癌死 不明 5 1 6 0 4	放+化 放+化+免 放 手+放+化 化+免 未治療	7 4 2 1 1 1

手=手術療法, 放=放射線療法

化=化学療法, 免=免疫療法

いては、793例中癌腫651例、肉腫142例で、全体の77%が扁平上皮癌、15%が悪性リンパ腫、その他8%となっているが、当科においては18例中癌腫13例、肉腫3例、その他2例であった。

治療法は放射線療法が主体であり、転帰は表4のごとくである。

なお昭和48年度と49年度の患者9例中、現在生存が確認されているのは1例のみである。

疫学上この上咽頭癌は、台湾大学において、1946年より1963年までの17年間の総計<sup>4)</sup>で男性では全癌症例中第1位(23.2%)を、女性では第3位(5.2%)を占めていたと報告されており、中国人に多発する傾向が顕著であることが知られているが、これに対し沖縄県においてはこのような傾向はまったくなく人種的相違という観点より興味を覚えた。

2) 中咽頭腫瘍

当科においては30例を経験し、これは頭頸部悪性腫瘍の13.2%に相当し、年齢は60才代がもっとも多く、性別は男性23例、女性7例、男女比3.3:1で諸報告<sup>2) 4)</sup>に比較して男性の比率が高い結果となった。

病理組織像は癌腫18例(扁平上皮癌)、肉腫9例(ほとんど細網肉腫)、不詳3例となっている。

治療は放射線療法が主体となっているが、最近では形成外科手術の進歩により、積極的に手術が施行されるようになり、治療成績も向上しつつある。治療法および転帰は表4のごとくであるが、化学療法の中に3例の動注施行例が含まれている。

なお昭和48年度と49年度患者7例中、現在生存が確認されているのは2例である。

この中咽頭悪性腫瘍のうち、軟口蓋癌、舌根部癌においては発癌要因として、過度の飲酒（とくに高濃度アルコール）と喫煙が大きく関与し、ほとんど男性に発現することが知られている<sup>4)</sup>が、当科においてもこの傾向が見受けられた。

3) 下咽頭腫瘍

頭頸部悪性腫瘍中もっとも予後が悪いとされているが、当科においては27例を経験し、これは頭頸部悪性腫瘍の11.8%に相当し、年齢は60代にもっとも多く、性別は全国統計<sup>2)</sup>では男女比が1.6:1であるが、当科では5.7:1であった。

通常下咽頭癌は梨状窩、輪状軟骨後部、後壁の3領域に分類されているが、諸報告<sup>4)</sup>でも当科においても梨状窩癌は男性に、輪状後部癌が女性に特徴的に多くみられた。

病理組織像は、ごく稀な例を除けば、すべて扁平上皮癌で、分化型を示している。

治療法および転帰は表4のごとくであるが、癌死15例は本統計の最高となっている。また末期癌で、初診時ただちに緊急気管切開術を施行し、他の治療に移る間もなく癌死したのが4例あった。

なお昭和48年度と49年度患者9例中、現在生存が確認されているのは1例のみである。

C. 喉頭の悪性腫瘍について (表5)

喉頭癌は頭頸部悪性腫瘍中もっとも多く、全癌症例の約2~4%を占めるといわれている<sup>6) 7)</sup>。1960年より1964年の全国統計では、2804例で、年間約600例とされている<sup>6) 7)</sup>。当科においては52例を経験し、頭頸部悪性腫瘍の22.8%に相当している。

年齢は60才台がもっとも多く50才代、70才代と続き、性別については、全国統計では男女比が10:1となっているが、当科においては男性51例に対して女性わずかに1例のみで、圧倒的に男性に多く認められた。

病理組織像はほとんど扁平上皮癌で、治療法および転帰は表5のごとくである。

表4 咽頭の悪性腫瘍

上咽頭 18 (♂15:♀3)	扁平上皮癌 11 腺 癌 1 細網肉腫 2 悪性リンパ腫 1 未分化癌 1 リンパ上皮腫 2	放+化+免 7 放+化 5 放 2 化 2 手+放+化 1 未治療 1
	健在 2 担癌生存 3 癌死 3 非癌死 0 不明 10	
中咽頭 30 (♂23:♀7)	扁平上皮癌 18 細網肉腫 8 悪性リンパ腫 1 不詳 3	放+化 11 放+化+免 10 化 3 手+放+化 1 放 1 未治療 4
	健在 7 担癌生存 5 癌死 6 非癌死 2 不明 10	
下咽頭 27 (♂23:♀4)	扁平上皮癌 22 異型乳頭腫 1 不詳 4	放+化+免 9 放+化 4 化 3 手+放 2 手+化 2 手 1 放 1 未治療 5
	健在 4 担癌生存 1 癌死 15 非癌死 0 不明 7	

なお当科における手術施行は23例で、うちわけは18例に喉頭全摘出術を施行し、その転帰は健在12例、癌死3例、非癌死1例、不明2例であり、また5例に喉頭全摘および頸部廓清術を施行し、その転帰は健在3例、癌死2例であった。これらの手術施行例の大多数が進行癌であったため腫瘍の発生部位が、声門上、声門、声門下のいずれであるか不明確な例が多く、全摘手術のみとなったものである。

早期癌症例においては、放射線療法、化学療法などにて、一次的治療を得ているため、部分切除術例は皆無であった。

現在までの喉頭全摘出の最高年齢は82才で健在である。

なお昭和48年度と49年度14症例のうち、当科において喉頭全摘出などにて加療した11例のうち3年粗生存率は54.5%となっている。

D. 鼻、副鼻腔の悪性腫瘍（とくに上顎癌）について (表6)

上顎の悪性腫瘍統計としては、種々の報告<sup>2) 8)~10)</sup>があるが、これらを総括すると年齢では50才代がもっとも多く、性別では男性でやや多く、患側は左右差がなく、両側はまれとのことであった。当科においては、28例を経験し、男性18例、女性10例、男女

表5 喉頭の悪性腫瘍

咽頭 52 (♂51:♀1)	{ 扁平上皮癌 41 類上皮癌 1 不詳 10	{ 手 12 手+放+化 6 手+放 4 手+放+免 3 手+化+免 1 手+化 3 手+免 2 放 1 放+化 5 放+免 1 放+化+免 4 化 1 化+免 1 未治療 8

比1.8:1で、患側は右側18例、左側10例で、両側癌はなく、28例中、上顎洞根本手術既往のあるものが3例であった。

病理組織像、治療法および転帰は表6のごとくであるが、当科における手術施行は上顎全摘術9例、これと同時に眼窩内容摘出術を施行した3例、計12例で転帰は健在6例、癌死5例、不明1例となっている。また昭和52年度の4症例に対し、動注法を含んだ化学療法、放射線療法および局所の清掃（ネクロトミー）の三者併用療法にて治療したが、その転帰は健在2例、担癌生存1例、癌死1例となっており、今後上顎全摘術の適応についての再検討を考慮すべきと思われる。

なお昭和48年度と49年度患者10症例のうち当科において上顎全摘術などにて加療した7例のうち3年粗生存率は71.4%となっている。

鼻腔原発腫瘍は12例、上顎を除く副鼻腔、とくに篩骨洞腫瘍を3例、それぞれ経験したが、病理組織像、治療法および転帰は表6のごとくである。

E. 聴器の悪性腫瘍について (表1)

聴器悪性腫瘍はまれであり、しかも大半は耳介あるいは外耳道に発生し、中耳原発はきわめて少ないとされているが、当科においては中耳悪性腫瘍を2例経験した。1例は初診時すでに他の診療施設にて中耳扁平上皮癌の診断にて治療をうけていたが、他の1例は、昭和52年11月初診、真珠腫性中耳炎急性増悪症と診断され、緊急手術施行、術中に乳突部より鼓室にかけて充満した腫瘍を認めた症例で、凍結迅速病理組織像が扁平上皮癌とのことで、ただちに

表6 上顎・鼻腔・副鼻腔の悪性腫瘍

上顎 28 (♂18:♀10)	{ 扁平上皮癌 16 細網肉腫 2 腺癌 1 乳様腺癌 1 基底細胞癌 1 不詳 7	{ 手 4 手+放+化 3 手+放 2 手+放+化+免 2 手+放+免 1 手+化+免 1 放+化 6 放+化+免 4 放 1 化 1 未治療 3
鼻腔 12 (♂5:♀7)	{ 扁平上皮癌 8 細胞肉腫 2 未分化癌 1 腺癌 1	{ 放 3 放+化 4 放+化+免 2 未治療 3
副鼻腔 〔上顎を除く〕 3 (♂2:♀1)	{ 腺癌 1 横紋筋肉腫 1 悪性リンパ腫 1	{ 放 1 放+免 1 未治療 1

手=手術療法、放=放射線療法、化=化学療法、免=免疫療法

放射線療法、化学療法を行い、現在一次的治癒を保っている。

F. その他 (表1)

以上の5項目を除き、その他として食道癌5例、甲状腺癌3例、上眼瞼、顎下部、下顎の悪性腫瘍をそれぞれ1例、それにHodgkin病2例、Wegener肉芽腫症3例の計16例を経験したが、食道癌、甲状腺癌、顎下部腫瘍は外科へ、上眼瞼腫瘍は眼科へ、下顎腫瘍は口腔外科へ、それぞれ転科となっている。Hodgkin病は1例が内科よりの依頼患者で、他の1例は当科で入院加療したが死亡している。Wegener肉芽腫症は3例経験し、全身的にはステロイド、抗腫瘍剤、免疫抑制剤などを使用し、一部局所に放射線療法を施行したが、2例が死亡、一例健在となっている(詳細は又吉ら<sup>11)</sup>の論文を参照)。

またこれら悪性腫瘍中重複癌と判定された症例は3例で、そのうちわけは下咽頭癌と胃癌、中咽頭癌と食道癌、喉頭癌と膀胱癌で転帰は全例腫瘍死となっている(詳細は又吉ら<sup>12)</sup>の論文を参照)。

なお病理組織像において不詳とは、初診時すでに他の診療施設において診断治療を受けていた場合(例えば喉頭全摘術など)や、診療を途中で止めた場合などを指し、治療法において未治療とは患者の

家族の了解が得られず、診療を拒否されたもの、他の診療施設への転院や他科への転科、緊急気管切開術のみで腫瘍そのものに対する治療に移れなかったものなどを指している。

転帰については、再発なく一次的治癒と思われた症例を健在とした。また転帰不明の要因として、他の診療施設へ移った場合、患者自身が治癒したものと判断し来院しなくなった場合、診療拒否および中絶したりした場合などが考えられた。

#### まとめ

昭和48年4月より昭和53年3月までの5年間に琉球大学保健学部附属病院耳鼻咽喉科において取り扱った悪性腫瘍患者228例の統計的観察を行った。

悪性腫瘍患者数は各年度ともに外来患者総数の4%を占めたが、これらを発生部位別に口腔腫瘍40例(17.5%)、咽頭腫瘍75例(32.9%)、喉頭腫瘍52例(22.8%)、鼻・副鼻腔腫瘍43例(18.5%)、聴器腫瘍2例(0.9%)、その他16例(7.0%)の6項目に分類して検討した。これらの発生部位頻度は、諸家の報告と大きな差はなかった。

性別では男性176例、女性52例、男女比3.4:1で男女ともに50才代、60才代の癌年令層に高頻度に見られた。

現時点での転帰について、総体的にまとめてみると健在66例(28.9%)、担癌生存14例(6.1%)、癌死54例(23.7%)、非癌死4例(1.7%)、不明90例(39.5%)である。

なお本報告では例数の比較的多いものについて3年粗生存率を算出し、喉頭癌では54.5%、上顎癌では71.4%を得たが、他の疾患については今後の課題とした。

当論文の要旨は、第57回琉球大学保健学部附属病院臨床懇話会ならびに第8回日本耳鼻咽喉科学会沖縄県地方部会学術講演会において発表した。

#### 参考文献

- 1) 竹田千里, 松浦 鎮: 口腔腫瘍, 北村武編, 頭頸部腫瘍, P.212-236, 医学書院, 東京, 1971.
- 2) 岩本彦之丞: 頭頸部腫瘍の現況, 北村 武編, 頭頸部腫瘍, P.3-14, 医学書院, 東京, 1971.
- 3) 水越 治: わが教室16年間の舌悪性腫瘍の統計的観察, 耳鼻咽喉科45, 29-40, 1973.
- 4) 佐藤武男, 宮原 祐: 咽頭癌—その基礎と臨床— P.19-23, P.24-27, P.62-65, P.82-91 金原出版, 1977.
- 5) 服部 浩: 上咽頭悪性腫瘍全国統計, 耳鼻咽喉科 P.59, P.581-585, 1966.
- 6) 岩本彦之丞: 喉頭腫瘍, 北村 武編, 頭頸部腫瘍, P.295-333, 医学書院, 東京, 1971.
- 7) 佐藤武男: 咽頭癌 —その基礎と臨床— P.11-37, 金原出版, 1972.
- 8) 片桐圭一: 鼻副鼻腔悪性腫瘍, 北村 武編, 頭頸部腫瘍, P.165-207, 医学書院, 東京, 1971.
- 9) 酒井俊一: 上顎癌, P.3-14, 金原出版, 1974.
- 10) 久保正治, 西田正孝, 頭司研作, 山本正宏, 山本 馨: 当教室の過去10年間の上顎癌治療と予防について, 頭頸部腫瘍, P.3, 90, 頭頸部腫瘍研究会, 1976.
- 11) 又吉重光, 新垣義孝, 栗田建一, 都川紀正, 野田 寛: Wegener 肉芽腫症の3例, 琉大保医誌, 1, 239-245, 1978.
- 12) 又吉重光, 栗田建一, 都川紀正, 新垣義孝, 野田 寛: 我々の経験した重複悪性腫瘍症例, 琉大保医誌, 1, 329-333, 1978.

# Statistical Observations on the 228 Malignant Tumors in the Oto-Rhino-Laryngological Clinic of The Ryukyus University Hospital during Past Five Years.

Masahiro KOJA, Ken-ichi KURITA Yoshitaka ARAKAKI,  
Shigemitsu MATAYOSHI, Tomohiro GENKA and Yutaka NODA

Department of Otorhinolaryngology, College of Health Sciences, University of the Ryukyus

The 228 patients with malignant tumors in head and neck were statistically observed during past five years from April 1973 to March 1978.

The proportion of the patients with malignant tumors in each year were always almost 4% of all patients in our ORL-clinic.

The male and female patients with malignant tumors were respectively 176 and 52, and the ratio of the male to the female was 3.4 : 1.

The malignant tumors were found in the so-called cancer age of 50 and 60 years of both the male and female patients.

As to the locations, in which malignant tumors are found, 40 were found in oral cavity (17.5%); 75 in pharynx (32.9%); 52 in larynx (22.8%); 43 in nasal and paranasal cavities (18.5%); 2 in middle ear (0.9%); and 16 in the others (7.0%). The frequencies in each tumor location were almost similar as those, which were reported in several literatures in Japan.

In the end of March 1978, the 66 patients are in good health (28.9%), the 14 alive with tumors (6.1%), the 54 died of malignant tumors (23.7%), the 4 died without malignant tumors (1.7%), and the prognosis of the remaining 90 patients is unknown (39.5%).

The rough alive ratios for three years were respectively 54.5% and 71.4% in the laryngeal cancers and the cancers of maxillary sinus.